

---

# 冒険の続きをしよう

天宮 凪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冒険の続きをしよう

### 【Zコード】

Z3701Q

### 【作者名】

天宮 凪

### 【あらすじ】

他所様にて色々と批評を貰つた結果、小説の芯の部分をきつちりと書く為にこの小説は完全改稿、もしくは別物として変更される恐れがあります。

読んでいただいていた方には申し訳ないのですが、暫くの間更新無し。お小説の消去、新規投稿になるかと思います。  
申し訳ありません。2011/02/04

Arcadiaでも同時投稿、同時に停止中。

「俺……いつも優しくしてくれた二ーナさんの事が好きなんだ。だから、付き合ってくれ」

ダスク・ワールドといつMMORPGでも、いつこつた色恋沙汰は良く起きる。

僕の場合は興味本位ではあつたけれど、女の子のキャラクターに成りきつていたらいつの間にか告白なんかを受けるようになつた。

でもゲームの中では女の子キャラだからって現実の僕が女の子になるわけではないのだ。

だから寄せられる好意への返答は決まつていた。

「『めんなさい。カルドさんの事は好きだけど……お友達じゃダメかな……？』

目の前にいるカルドという男冒険者に問題があるのでない。むしろ好きな部類に入る。

でも僕からの好きは友達としての好きであり異性に感じる好きではないのだ。

それは僕が男だから当然なのであって、僕が僕である限りいつた想いに応えるなんて絶対にありえないことだった。

「はあ」と僕はため息を一つ付く。

カルドという冒険者は最近仲良くしていたプレイヤーだった。でも告白されればその口から少しだけその人物との付き合い方も変わつてくる。

簡単に言えば気まずくなつて疎遠になるのだ。

疎遠になれば次第に合つ回数も減り、それはつまり仲の良い友達を一人失つたことになるわけで、ため息の一つや一つ付いても仕方ないと思つ。

「やつぱりこにじたのね」

「……うん」

かけられた声に、僕は少し間を置いてから答えた。

「こにじるつて事は、やつぱりカルド君関係でしょ」

「あはは……。バレバレ、だよね」

「そんなのすぐにわかるつて、いつから友達やつてると思つてるのよ」

友達。

そう自分が言つた彼女はミシエルといつ冒険者仲間だった。  
彼女は人間に猫耳と尻尾を付けたようなニヤードという種族のキヤラクターで、ダスク・ワールドが始まつて以来ずっと遊んできた友達だ。

そんな古株の友達だからこそ僕が落ち込んだ時の行動なんてお見通しなんだろう。

「で、今回も振つちやつたの？」

「う、うん」

「もつ、振つて落ち込むなり振らなければいいのこ」

「そう言われても付き合つなんて考えられないし……」

ひついたやつとりは僕とミシエルの間では何度も交わされてきた言葉だった。

だからミシェルは落ち込んでいる理由が友達を失うことだつて知つてゐる。

でも僕が本当は男だということを知らないから、誰かと付き合つてみてもいいんじゃない？ なんてミシェルは思つてゐる節があるようだつた。

「あー、もー、クヨクヨしてないで遊ぼっ！ あたしもやつとレベルカンストしたから転生出来るようになつたのよ」「え、本当に？」「そーだよ。頑張つたんだから！」「ミシェル、おめでとう。でも、今はその……」「行きたくなつていうんじょ。でもダメーー一緒に転生するのは前からの約束だからねー！」

ミシェルは駄々を捏ねるようて僕の周りをぐるぐると走り回る。転生はキャラクターの能力値やスキルを維持したままレベル1から育て直すことができ、強さの限界を突破させてくれるシステムだ。そんな転生は僕とミシェルの目標であり、一緒にしようと約束していた大切な物だつた。

何も今約束を持ち出さなくともとは思つたが、ミシェルの様子を見ると我慢が利かないらしい。

「わかった。わかったから落ち着いて、ちやんと一緒に行くからー

僕はそう言つと氣分を切り替えた。  
楽しみにしていた転生だ。

僕は徐々に氣分が上向きになつていく中、氣分転換の機会を作つてくれたミシェルに感謝した。

## 冒険の続きをしよう

うつすらと瞳を開けた。頭が重く、鈍い。目の焦点が中々合わない。

ほんやりと霞む思考に僕は自分が眠りについていたことに気が付いた。

はつとして顔をあげると、そこにはレンガ造りの家が立ち並び……、レンガ造りの家が立ち並び？

疑問に思つた僕は勢い良く立ち上ると周囲を見渡した。

正面には古臭い、中世ヨーロッパを感じさせるよつた建物。道行く人はやたら質感の良い鎧やらチュニックやらを着たコスプレ衣装を身に着けている。

見上げれば青々とした空。つまりは家の外。おかしい。僕は自分の部屋でパソコンの前に座つてゲームをしていたはずなのに。

「なんで、なんで！？ なによこれ！ あたしにどーして耳なんてつ！ あ……、尻尾まで生えてる……！」

すぐ近くから大きな声がした。

気になつて声のした方に視線を向けると、タンクトップに短パンを穿いて猫耳と尻尾を生やしている女人の人気がいた。

その姿には見覚えがある。

恐らくはダスク・ワールドの種族ニヤード……なるほど、これもコスプレだらうと思えた。

でも、どこかでこの人を見たことがあるよつた。

なんて考えていると、その人は僕をじつと見つめ「うーん」と唸つたあと何かに納得したように手を一度叩き、口を開いた。

「そここのキミー、キミだよキミー、うそい、キミー、なんかあたし変な格好してるけど怪しくないんだけど怪しくて、あー！ もう！」とにかくこいつてどこかわかる？

「え、えええと、どこかつて言われても……逆にこいつがどこか聞きたいというか……」

「ん、その耳つてエルフでしょ？ つまりこのわけわかんない中世ワールドの現地人」

「耳？」

「そそ、耳」

わーっとまくし立てるような喋りに若干引きながらも、言われた部分に手を伸ばして見る。

耳、と言われても別に普通の……大きな、横に尖つて、あれ。

「耳だ！ エルフ耳！」

「そつそつエルフ耳……つて、自分がエルフだつて気づいてなかつたの？」

自分がエルフだなんて、そんなバカなと思いつつも視線を自身に向けた。

視線を下げれば衣服を盛り上げる大きな双丘。視界の端に見える金色の髪はとても長い。

白く纖細そうな肌に小さな手。身に着けているものだつて緑のチニツクワンピースを腰のベルトで止めた簡素な服。

これに耳を加えるとたしかにエルフっぽいかも……。

いや、エルフっぽいとかそこが問題なんじゃない。僕の体が女の子になつてている方が問題なのだ。

「コホンッ！ 驚いている所悪いんだけど、その様子だとキミも不

本意にその姿になつてゐる?」

「キミも、という事はもしかしてそつちも?」

「うん、こっちも。あたしこんな耳付いてるはずないし、ていうか尻尾生えた人間なんていなーいってば」

それを言つなら僕だってこんな胸や細い体はしていない。

何にしても僕とこの人は同じ境遇で、たぶんこの人はダスク・ワールドのニャードという種族になつてゐる。

僕はエルフらしいけれど、なぜそんなことに? と疑問符が何個もついてしまいました。

現状はどう考へても異常だと言えた。

「ちょっと、ねえ。聞いてる?」

「あ、うん。えっと、何の話?」

「だーかーらー、キミってなんかあたしの知り合いに似てるって話

「知り合いに?」

「うん、知り合いというか友達なんだけど」

友達、その言葉で思い出すのはついさっきまでダスク・ワールドで一緒にいた彼女のこと。

ちょっと勝ち気なそうな瞳に細身の体、ショートにした赤い色の髪、それが彼女の容姿だった。

そして目の前の人容姿もゲームの中の彼女に似てゐる。

類似点を見つけてしまつと、話している時の勢いというか雰囲気もそれらしく感じてきた。

「私もあなたに似てる友達を知つてゐるよ

そうだったらしいな、という期待を込めて同じ意味合いの言葉を重ねた。

僕ではなく私として答えたのは、彼女の友達はあくまでもゲーム中の二ーナというキャラクターだから。

もしこの人人が彼女じゃないなら、正直に話す方が楽だし正確な情報を取りとりしやすいとは思う。

でも確信を持っていた僕は私と名乗ることを選択した。

「……もしかして、二ーナ？」

少しの沈黙の後、彼女は真剣な顔つきで僕を見つめながら問い合わせてきた。

二ーナという名前を知っているのなら間違いない。

「うん、そうだよ。ミシェル」

そう言つと僕は彼女に向かつて笑みを漏らした。

ゲームの中でしか会つた事がないとはいって、僕と彼女……ミシェルは長い付き合いの友達だ。

だけど実際の言葉にして彼女の名前を呼ぶのは初めてで、少しだけこそばゆい感じがした。

僕らは人通りを避け、状況を整理する為に通りの裏へと回ったのだが……。

暫くもしない内にミシェルは「むむむ」と言いながら僕の顔、そして胸を凝視しながら話の方向性をえてきた。

「なんていうか、二ーナはずる」と思つた

「え、え、急にどうして」

「だって、今の二ーナはなにこれつて位可愛いし。なんでいかにも

少女つて外見なのにそんな胸育つてるわけ

「う、こんなの、私欲しくてなつたわけじゃないし……」

実際見るまでは可愛いかどうかはわからないけれど、僕の作った二ーナというキャラクターは小柄な体系で……その、巨乳気味だつたりする。

では僕がその姿になりたかったかといつて、ハッキリ違つと答える。

どちらかといえば、こんな女の子が居ればいいなーといつて願望から生まれたキャラクターなわけであつて。

そもそも性別が変わることなんて望んでいないわけで。

「あたしの方なんてこれだけよこれ。リアルでだつてこんなに酷くないのに」

僕のこんな内心を知らないミシールは、自身の胸をペタペタと触りながら気落ちした様子で言つた。

僕としては余計な物の少ないその体と交換して欲しい位だけど……いや、でも、猫耳は嫌だ。恥ずかしい。

「で、でも、ほら、ミヤードはスリムでみんなそんな感じだし。すらつとしてて格好いいといつ……整つた綺麗さがあると思つよ」「たしかにそうなんだけど、なんか納得いかないといつていうか……」

「それにこんなのがつても重いだけだし」

「こ……」

「こ？」

「この口がそんなこと言つのか。あたしだつて重いとか言つてみたいのにー」

僕が自分の胸を見ながらつぶさりしたよつて言つと、ミシールに思いつきりほっぺをひつぱられた。

「て、痛い、痛い！ 頬がのびる！」

なんかやめさせようと、ジルの手をどうとするか、その手はビクともしない。

「ひ、ひふあい！ やめへー！」

「半分よこしなさい」「このー！」

あらがるあらがるははー！

ミジルはひとりじきり僕のままで遊んだ後、やっとその手を離した。

「うう、すごい痛かった……」「あたしそんな強くしてないわよ。軽くむにむにって触つただけなのにー」

すこし痛かた

の二十一

僕の痛がる様子を見ながらミシェルは不思議そうに手を開いたり閉じたりしている。

ど痛かつた。

る敏感肌とか？

むしろニヤードの力が強い?  
さつきもミシユルの手をどかせな  
かつたし……。

「ね、二ヤードって怪力種族じゃないよね？」

「あはは、そんな訳無いでしょ。猫らしく速さが自慢の種族だしー  
つて、あー、でもあたしのキャラ近接戦闘特化だから力強いか

も

「ミシェルは近接ステータスばかり振つてたのは知つてるけど、でもキャラのステータスが反映されてるなんてそんなの……」

「ありえないはないわよ。だつてあたし達がゲームのキャラになつてるっていうのがまずありえないんだし」

状況を整理している時に互いが自分のキャラクターになつている事は確認していた。

そんな事は普通に考えたらありえないのだ。だから何があつたつて不思議ではないかも知れない。

となるとダスク・ワールドの力、耐久、知力、器用、速さという五つの能力値が僕たちに影響を与えていける可能性はある。

ミシールの場合は近接戦闘に重要とされる力、そして種族の特性を生かすよう速さに多くのポイントを振つている。

このポイントというのはレベルアップ毎に一定数配られ、好きなように能力値に振ることが出来るようになつてているのだ。

とりあえずその能力値の恩恵をミシールが受けているなら力が強いという仮説はあつていい。

「能力値が関係すると、私つてすごい非力になつちゃう気がする。力とか全然振つて無いし」

「二ーナの場合は知力とかでしょ？」

「うん、エルフって魔法を使うイメージあつたから、それっぽい知力に全部振つてるよ」

「あ、じゃあさ、魔法とか使えるんじゃないの？」

「うーん、使える感じは……」

魔法という単語を意識した途端、僕の頭に言葉が羅列された。

そこからゲームの中で最も多く使用したであろう魔法を選択する。あくまでその思考は自然で、慣れ親しんだゲームでの一連の動作と似ていた。

僕は祈るように両手を胸の前で組み、キーとなる言葉を口ににする。

我らを見守りしモノ、聖なる光よ。大いなるその翼にて傷を癒せ。

『ヒーリングー！』

翼が舞い、光が後を追う。

それは輪を描くように僕を中心にして集まり抱擁する。

光系統、初級に位置する回復魔法。

ゲームの中でピンチの時に何度もお世話になつたスキルの一つだ。

「うわ、ほつべのヒリヒリが治つてゐる……」

翼が小さな粒子になつて霧散すると、僕は呟いた。  
見た目だけではなくちゃんと効果もあるらしい。

「す、すごい……。二ーナ、魔法、魔法よ！」

「うん、なんか使えるみたい。頭の中にパーって文字が浮かんでき  
て、いけるなーって思つたら出来ちゃつた」

「頭の中？　じゃあ、あたしも……ん、ー！」

「ど、どう？　」

「ん、ー、う、ー！　……ヒーリングー！」

ミシェルは眉間に皺を寄せ何度も唸つたあと、回復魔法のキーとなる言葉を大声で口にした。

「……」

しかし効果は現れず、木枯らしが通り過ぎたような微妙な空気が流れれる。

「ねえ、二一ナ」

「な、なにかな」

「これ、すごい恥ずかしいわよ

ならあんなに大きな声で言わなければいいのに。

とは思つたけれど、どうしてミシェルは魔法を使えないんだろうか。

僕とミシェルの違いは、種族、ステータス、前衛、後衛、魔法……なん?

「もしかして、ミシェルって魔法覚えてなくない?」

「ん、魔法なんて覚えて無いわよ。知力ないし、近接だよあたし」

「うんうん、だからたぶん、近接なら近接技能つてあるよね」

「あ、そっか。キャラになつてるなら覚えてるのしか使えないってことね」

「うん、きつとねうだよ。だからミシェルだとそつちの方を使えるんじやないかな」

僕はそう言つと一步下がつた。

近接技能は攻撃が主になつているから近くにいては危ないと思つたからだ。

ミシェルは考えるそぶりを見せると、腰を落としたまま息を吸い込んでキーとなる言葉を口にした。

『クロスブレード!』

それは十字を模した剣技。  
ゲームではたしかアンデッドに絶大な効果を誇る、使い勝手のいい技だ。

エフェクトは金の十字架が表示されて……、されて……？  
おかしい、またしても何も起こらない。

「あたし、す、ここに気が付いたやつだ

「うん、偶然だね。私も気が付いた」

そう、これは剣技なのだから剣が必要になる。  
でもミシューは素手、だから……。

「剣がないと発動するわけないじゃない」

「だよね」

今度こそ本当に、木枯らしが通り過ぎていくのを感じていた。

レンガ造りの家が立ち並ぶ表通り、城まで続く道を僕らは歩いていた。

ミシエルが軽快に歩く中、僕はトテトテと時折駆けるようにしながら追いかける。

キャラクターの歩幅が違うし、現実では穿く機会もなかつたブーツのせいで上手く歩けないのだ。

ゲームの中ではみんな等速だったのに、少し不公平だと思う。

「歩くの早い、早いってばー」

「違う、違う。一ーナが遅いんだから……、もう、仕方ないわねー」

ゆつくつとした歩調になつたこと、「ふう」と一息付いて安堵する。

文句を言しながらも歩調を合わせてくれる所はミシエルらしい。とにかくにも僕らは田的田へと向かつていて、それがどこにあるかを知つていて。

なぜなら僕らはダスク・ワールドの世界にいるのだから。家と家が示し合わせたように揃つた綺麗な街並みも、行き交う人々、エルフ、ニード、その他もうもう種族が入り混じつたこの街の風景も。

規模こそは大きくなつてはいるものの、僕とミシエルの知つているダスク・ワールドというゲームそのものだった。

だからゲームの世界に来てしまつたというのが二人の間での共通認識。

さて、そのゲーム、MMORPGダスク・ワールドだけど、そこまで特徴のあるゲームではない。

普通のMMORPGと同じように、街の外やダンジョンを徘徊するモンスターを倒して経験地を得るレベルアップ方式のゲームだ。生産と呼ばれる物作りのシステムは多少は凝つっていたようだけれど、材料を規定数集めて製作のボタンをクリックすれば出来上がる簡単な物だった。

キヤラクター・カスタマイズも近年の定番ともいえる膨大な種類のパーティから選べる物。これも自由度はあれ定番だ。

一通りの対人戦や、自分の家をてるハウジング、膨大なクエストとこまごまとしたものはあつたけれど、所謂前時代的なゲーム。そんなダスク・ワールドに僕が惹かれた理由は何だつたろうか。

「うーん、雰囲気かな……？」

「ん、何か言った？」

「あ、うん。ダスク・ワールドって建物とかそういう景観の雰囲気がいいなって」

「それはそうよ。開発者のインタビューでだったと思うんだけど、中世ヨーロッパ、ゴシック調の雰囲気を出すのに現地取材に何ヶ月も滞在したとか、そういうの載つてたもの。だから、街灯一つ一つも本格的な……」

話を聞くとどうやら世界の雰囲気とかそういうのが売りの一つになっているみたいだ。

もしかしたら僕もそんな雰囲気に惹かれたのかもしれない。

「だからね。この街が、ほらあそこに見えるお城を中心に広がってるのも……」

「とと、ミシェル。ストップストップ」

「え、なーに。今からがいい所なのよ」

「えつと、それはいいんだけど、もう銀行に着いちゃったよ」

「あ、本当。うー、でもほらあそこのお城がね」

「あ、本當。うー、でもほらあそこのお城がね」

説明の続きを始めたミシェルを他所に、僕は銀行へと足を進めた。

「ほらほら、先行つちやうよー  
「……あつ、待つてよーーナ！」

銀行

それはダスク・ワールドにおける冒険者のアイテムを一手に扱う施設だ。

銀行という名称には若干の引っかかりを覚えるものの、銀行メイドなる受付嬢が窓口となつて僕らの冒険をサポートしている。その銀行メイドは一人一人個別の姿勢をしていたりと、無駄な所に凝つているなーと思つていたものだ。

そんな銀行には僕らの集めた装備やお金といった様々な物が預けられている……はずだった。

「ちょっと、どういうことなのよー！」

「ですから何度も申しますけれど、お客様のアイテムはお預かりしておりません。いい加減にしてくださいませんと、ガードを呼びますよ」

物凄い剣幕でダンツと机を叩きながら銀行メイドに詰め寄るミシェル。

そうなるのは半ば当然で、ここが本当にダスク・ワールドなら僕らのアイテムは銀行にあるはずなのだ。

だからアイテムがないという銀行メイドの対応は腑に落ちない。それに預けていたアイテムの中には人から貰つた大切な物も含まれているし、ゲームが始まつてから集めに集めたリアリティの高い物だつて大量にあるのだ。

ないと言われたからといって中々諦めきれるものではなかつた。

「だからいはずなんてないんだつてば！」

「ですから……、ふう。ガード、来てください！ 営業妨害です。お願いします」

「営業妨害つて何よ。いいからあたしのアイテム……、つて、何よあんた。ちょっとビーム触つて！」

結局の所、街を守る為に存在する警備担当のガードに僕らは追い払われてしまつた。

僕の方のアイテム保管の有無は聞いていないけど、それを聞く為にもう一度中に入るの是不可能に思えた。

銀行入り口に配置されているガードの視線が友好的にはとても見えないし、ガードは治安維持の為のNPC。

そんなガードにこれ以上悪印象を貰えるのは良くないと思えた。

「なんなの！ なんなの！ なんなの！？」

ミシェルは尻尾を立てながら地団駄を踏み、銀行の入り口を睨む。その気持ちはわかるけれど、それよりも今後どうするかの行動指針を立てなくてはならない。

銀行のアイテムがあれば大抵のことはどうでもなると考えていた。でもそれが引き出せないと僕らは何もない状態でこの世界を歩かなくてはならない。

魔法が使える僕はまだどうにかなるけど、少なくともミシェルにはスキルの発動条件になつてている武器が必要だつた。手持ちのお金もない、となると取れる方法は……。

「ね、ミシェル」

「なによ……」

「えっと、『めんなさい』。銀行使えないみたいだから、次どうしようかなって……」

「あ、う、こっちがごめん。あの銀行メイドが悪いんだから——ナにあたつても仕方ないのよね……。でも次つて言われてもどうしたらしいかわからないわ」

振り向きながら不機嫌そうに返事をしたミシェルだが、僕の顔を見ると罰が悪そうに視線を横に逸らした。  
それに合わせて尻尾がしゅんと垂れていくのはちよつとだけ面白い。

「じゃあ、職業選定所に行つてみない？」

「え、職業つて……初心者でもないのにどうしてそんな場所にいくのよ？」

「ちよつと考へてたんだけど、私達はダスク・ワールドの世界にいるよね。で、私達はキャラクターになつて、着てる装備つてたぶん初期装備」

「そうね。この安っぽい服とか初期装備かもしれないわ。でもどうしてかしら、あたしこんなの装備してなかつたはずよ」

「うん、自分のキャラになつてるなら私達が初期装備してるので変だよ。でも可能性があるとすれば……転生したから」

「転生？」

「そう、転生。文字通り私達が生まれ変わつてるとしたら新規キャラと同じ初期装備でもおかしくないし」

「なるほどなるほど。それはあるかもしれないわね」

「うん、新規キャラと同じ扱いなら一度しか貰えない選定所の報酬だつて貰えるはずだし。確かに転生だと職業を新しく着き直せるってどこかで……」

「それ間違いないわ！ 早速行つてみましょ！」

「で、でも、間違つてるかもしないし……つて、わ、わ、そんな

に急がないでっ」

説明を聞いたミシェルは急かすよつて僕の手を引つ張つぱると驅けだした。

職業選定所は戦い方なんかの基礎を教えてくれる大きな施設で石作りの神殿のような外觀をしている。

冒險者は最初にここを訪れて自分の職業を決定することから物語が始まるのだ。

その職業を決めると、職業に合わせた武器を報酬として入手することが出来る。

それが僕たちの狙いだった。

「ここに名前と希望の職業を記入しろ」

職業選定所に付くと受付から一枚の紙を受け取った。

「名前だけでいいのかな……」

「ん、苗字ないんだから別にいいんじゃない?」

「一、二、三……つと、職業はどうしよう。

前に僕がついていたのは神聖術士。神の奇跡……光の魔法で味方を支援、回復する職業だった。

他には前衛に分類される格闘家、斧戦士、剣士、槍騎士、狩人、盗賊や。

後衛に分類される精霊術師、屍術師、鍊金術師、など様々な職業がある。

転生は前回のスキルを受け継いでいる、だから神聖術士という選択肢はない。

前衛職にして何でも出来る万能型にするのも面白いけど、僕の能  
力値は知力のみ……残念ながら後衛向きだ。

「これにしよう」

そう言いながら僕は精霊術師と記入する。

鍊金術師は鍊金にお金がやたらかかる職業だつたと記憶してたし、  
屍は……ゲームならまだしも現実で仲良くなろうとは思わないの  
でやめておいた。

それに何より、エルフなんだからイメージ的に精霊魔法位使えて  
もいい気がしたのだ。

「なになに……えーと、二ーナは精霊術師にしたのね」

「ミシェルは？」

「あたしはこれ。盗賊よ」

少し意外だと思った。

僕が魔法を使つたときにはしゃいでいたから、魔法を使える職業  
に付くのかと思っていたのに。  
でもどうして盗賊に……。

僕は記入した紙を受付に渡しながらミシェルに問いかけた。

「盗賊なの？」

「あたし達つてなにもないし、アイテムのドロップ率アップがある  
盗賊でお金稼げた方がいいじゃない」

すごく納得。とても切実で現実的な理由だ。

受付の人は一人分の紙を一つに纏めると「奥へ行つて女神に祈れ、  
それだけでいい」と言って女神を模した像を指差した。

奥はこじんまりとしていた。

女神像がぽつりと一体立つてирだけで無駄なものはなにもない。人すらもいない。

なのに何かに見られているような、そんな気配を感じた。

「私からやつてみるね」

僕はそう言つと胸の前で両手を祈るよつて呑わせて瞳を閉じた。途端、僕の中に何かが流れてくるのを感じた。

言葉、思想、呪文、歴史、精霊、世界……知識を与えられている感じがする。

恐らくは精霊術師に必要な物なのだろう。

暫くして僕は瞳を開いた。

手には硬質な感触がある 鉄で作られた魔法系初期装備のロッドだ。

頭の中には新しい魔法がある

『ファイアーボール』火の攻撃魔法。それは精霊術師になれた証

だつた。

僕はミシェルの方を見て頷く。そして祈りを諭すよつて一步下がつた。

ミシェルは僕がしたように両手を合わせて瞳を閉じた。

静かに時が流れる。ピクリとも動かないミシェルは今、盗賊の知識を与えられているのだろう。

そう思つと女神像を前に祈るミシェルの姿は、どこか現実とは違う気がして美しくも見えた。

鈍い光が反射する。

ミシールの手には報酬のダガーが左右に一本づつ握られていた。

「ふふ、ガンガン稼ぐわよ！」

「ヤリとした笑みを浮かべて僕の方を向くミシール。

「おー！」とでも言って賛成したい所だけど、僕は致命的なことに気が付いてしまった。

たぶん言った方がいいだろう。

「ミシール。思うんだけどダガーだと短剣だから剣技って使えないんじやないかな……」

そう言つといミシールは手にしたダガーをポロリと落とし睡然とした顔をした。

そして「あつ、ああつ！ しまつたー！」といつ悲しい叫び声が職業選定所に響き渡つたのだった。

### 03・『色々とダメなのだ』

「それじゃ、いっくよーーー！」

気持ちの良い青空の下、街の外にある平原で僕は氣合の声を上げた。

狙うはひよこを太らせて巨大化したようなモンスター……ヒヨップ。

脳内で回転する文字の群れ、そこから選択するのは火の魔法。

力の象徴たる赤の精靈よ。焚ける炎となり、集え。

「ファイアーボー……」

キーとなる言葉を言い終わる前にヒヨップがぶぎゅ！ という断末魔を上げて消滅した。

ミシールのダガーによる一撃でヒヨップが倒されたのだ。

「あ、またヒヨップの羽だわ」

楽しそうにドロップアイテムを拾うミシールは全く自重しない。さつきからこの調子で一度も魔法を使えてなかつたりして、僕としてはとってもびみょーな感じの狩りになっていた。

一回位魔法の試し打ちをさせてくれたつていいのに……。

「とーーー！」

そんな掛け声がして振り向くと、ヒヨップにダガーが突き刺さるのが見えた。

そしてまたふぎゅ！ と断末魔が響き、羽が地面に落ちる。

「またまた発見！ とつやーー。」

ふぎゅ！

ふぎゅ！

ふぎゅ！

ぴょんぴょん跳ねるように戦い続けるミシユルの狩りは日が暮れるまで続いた。

僕らは大量のヒヨツピの羽を持ち帰ると街で売りさばいた。

単価が安いから、量が多くても大した額にはならない。でも今日の宿代位は楽に確保できる金額だった。

「二ーナつてば。ホント『めーん！』

「別に怒つてないですし謝らなくていいですー。」

ガヤガヤと人の熱気と食器の音が響くこの場所は酒場。一階は宿屋になつていて兼業しているらしい。

そこで何をしているかと「う」と、料理を頼んだ待ち時間にこいつをつて問答を続けていたりするのである。

その原因はもちろんミシユルが全部モンスターを先に倒してしまつたことについて。

別にミシユルが悪いわけじゃない、魔力の消費とか効率とかを考えればミシユルが見つけたらサクサク倒すのは普通なのだ。

でも、でも、少し位魔法を使わせてくれたつていいと思う。

ハツキリ言つて僕の機嫌は悪かつた。

「ホントにホントに」「めんつてば。」「一ナつて回復職だつたから攻撃とかしないと思つて、いつも通りにえいやーつて」

「だからもういひつて言つましたー！」

「う、でも、ほら、次からは『氣を付けるから』……。あ、『飯来たよ！』

そんな僕たちを『氣にする風でもなく、コトントントン』と注文した料理が置かれていく。

料理を運んできたおばちゃんが「ヒョッピの丸焼きとタロルカジコースだよ！ たんと食つていきな！」なんて言つて奥へさがつていいく。

テーブルにはこんがり焼けたヒョッピ。タロルカという果物を摩り下ろしたジュース。

香ばしい匂いが食欲をそそらせ、僕のお腹をぐうーっと鳴らさせた。

「今日はあたしのオーリだから、ね、食べて機嫌直して！ ね！」  
「別に怒つてないし、お金は共有つてさつき決まつたし……」

お腹が鳴つた事が恥ずかしかつた僕は、ブツブツと文句を言いながらもヒョッピの丸焼きを一切れ口にした。

何度も噛む。パリッとした皮の食感と溢れる肉汁がとても美味しい。スパイスも効いてて思わず笑顔になつてしまいそうな味だ。

もう一口食べようとヒョッピの丸焼きに手を出した時、にやりと笑うミシェルと目があつた。

「さて、あたしも食べよーっと。……あ、コレ美味しーー！」

良くわからないけど何か負けた気分……。

ヒョッピを食べ終わると、僕たちはタロルカジュースを飲みなが

ら今後の予定について話し合っていた。

「うやつてその日暮しな生活するだけなら毎日ピラッピを倒していれば大丈夫そうだけど、僕らにはそつもいかない理由がある。

「どうやつたらこの世界から帰れると思つ?」

「うーん、そこは見当も付かないよね」

「私も……。じゃあ、このままここで暮らすの?」

「それもアリと言えばアリなんだけど、メインストーリーのせいでダメよね」

色々とダメなのだ。

帰れる方法がわからないのは仕方ない。  
でもここでのほほんとして暮らすというわけにもいかないのがダスク・ワールドという世界。

ダスク・ワールドにはクエストが無数にあるけど、その中でメインストーリーと呼ばれるモノが存在する。

それが中々に曲者で、世界の破滅を食い止める為にプレイヤーが奔走するクエストなのだ。

破滅を止めるのはプレイヤーなのであって、つまりは何もしなければ世界が破滅しそうな感じがするわけだったりするわけで。

「ダメだよね。知らない内に世界が壊れましたーって死んじやうのは嫌だし」

「だからといつてあたし達でクエストクリアできると思つ?」

「あはは……思わない、かな」

ミシェルが問い合わせて來てるようだ、メインストーリーは危険極まりないクエストなのだ。

世界の破滅と銘打っているのだから当然と言えば当然だけど、高レベルのモンスターが多数出現する。

それは今の僕たちでは到底クリア出来るものではない。なにせ装備やアイテムが一切ないのだ。

「銀行が使えばなんとかなったかもしれないんだけど、使えなかつたのが痛いね」

「そうよ。あの銀行メイドさえ……」

銀行での出来事を思い出したのか、不機嫌そうな声を出すミシュル。

そこから話題を逸らすように僕は慌てて言葉を続けた。

「とりあえず、装備をなんとかするのが先決だね！」

「……そうね。さすがにメインストーリーをどうするかは装備を整えてからの方がいいわ」

「うん、何かしてゐ内に帰る方法とかも見つかるかもしれないしね」

話が粗方纏まると僕らは残りのジュースを飲み干して席を立つた。そして酒場のマスターに声をかけた。宿に泊まるためだ。

「おじさん、宿取りたいんだけど大丈夫？」

「ああ、一人部屋なら一つだけ空いてるよ

「んー……、それで構わないわ」

「銅貨10枚だ」

「はい、お金。これでいいわよね

「鍵はコイツだ。一番奥の部屋を使いな」

「ほり、一ーナ行くわよ」

手際の良さに唖然とするしかなかつた僕は、ミシュルに尊敬の眼差しを向けながら一階への階段を登つた。

僕らのとつた部屋はベッドに椅子と机が一つ付いていた。ぱっと

見は質素だったものの、せちんど掃除されていて悪くない感じがする。

しかしベッドが一つしかないところのは如何なものか。部屋を変えて貰つた方がいい気がした。

「ベッド一つしかないし、ちょっとマスターに聞いてくるね

僕はやうやく部屋を出ようとした。

しかしミシェルは不思議そうな顔をしてしてこんな事をのたまつたのだ。

「え、一緒に寝ればいいじゃないの」

まるで何でもない」とのよう言つたミシェル。

でもそれはよろしくないと僕は思つ。

一応僕は男なのであって、ミシェルは女の子……って、あれ、僕も外面だけは女の子だ。

いや、でも……。

「それに部屋は二つしか空いてないってことだったわよ

僕が固まつたままではいると追い討ちをかけるように言葉を続けてくる。

「でもでも別の宿に行けば空いてる所あるんじゃないかな、とか……」

「えー、疲れるだけだしそんな嫌よ。それに同姓同士なんだから恥ずかしがることもないし」

「私つて寝相良くないから……一緒に寝たらミシェル寝れなくなつちやうよ……」

「気にしなくていいのに……、とかなんでそんな嫌がるのよ

……」

「ダメなものはダメ！ 私はいつまで寝るからミシェルはベッド  
使ってね！」

僕は椅子を引き寄せると少し強めの口調で言った。

とにかくダメなものはダメなのだ。

ミシェルは女の子であつて、友達なのであつて、性格はちょっと  
強引だけど実は気が利いて優しい所もあつたり……。

容姿だってスラリと伸びた手足は綺麗で、力の能力値をたくさん  
振っているはずなのに女の子らしく柔らかそう。

顔だって吊り目気味なんだけど、猫耳と合わせて可愛っこいと  
かなんというか、そうじやなくて！ 違う違う違う！

ミシェルを観察するように見ていた僕はかぶりを振つて背を向け  
た。その時だ。

僕の体がグラつと揺れた……いや、引き寄せられたと言つべきか。

「そんな所で眠れるわけないでしょー……えーい！」

ミシェルが僕の体を後ろから抱きしめて、ベッドへと引寄せり込  
んだのだ。

「え、えつ！ ミシェル、ダメだつて。やめてーーー！」

「ふふ、捕まえた！ 今日はこのまま寝けりやつか。ダメって言つ  
ても離さないわよ」

言つても離してくれない上に、全力で抵抗してゐるにビクともし  
ない。

僕の理性の為にも一緒に寝るなんて絶対にダメなのに！

「いーやー！ダメー！離してー！ぜったいにダメなんだってばー！」

「二ーナは力に振ってないから逃げられないわよー。早く観念しなれーーー！」

そう言つてより強く僕を抱きしめるミシェル。

背中にあたる柔らかなものが今はとても憚らしい。……絶壁だと思つていたのに、案外なんていうか卑怯だ。

それにしても、うう、どうして力に振らなかつたんだろつ……。

「あ、二ーナやつぱり大きいー！この、いづしてやるー！」  
「ひわあー！ やーめーでー！」

結局の所、僕はミシェルの玩具件抱き枕になつたまま眠ることになつた。

……。

ミシェルの体温にも慣れ、寝息にも動じなくなる位には時間が経ち、夜も耽つた頃。

いつしか酒場から漏れる騒ぎ声も聞こえなくなつていた。  
街から明かりが消えるような、そんな夜遅くに遠くで何かが爆ぜるような音がした。

僕は気にするでもなく眠りこいつとしたものの、段々と外が騒がしくなつてゐる事に気が付く。  
切羽詰つたように叫ぶ声と、ガシャガシャと鉄の擦れ合つ足音が聞こえる。

とてもではないけど眠れそつにはなかつた。

「んー……、つるせいいなあ……」

文句を口にしても、音は止まない。

むしろ宿の中まで騒がしくなつて来てこるよつだつた。  
ドタドタと人の駆ける足音とざわめき、そして僕らの部屋の扉を  
ダンツー・ダンツーと叩く音が響く。

「おい！ 中に誰か居るか！？ いるなら逃げろ！ 街にモンスター  
が入りきやがつた！！」

扉越しにそう叫んだ人は言い終わるとすぐに扉から離れ、去つて  
いった。

モンスター？ そんなバカな、と思つ。

ここは城のある、城郭に覆われた街だ。普通に考えればモンスター  
が入り込める余地はない。

でも、でもだ。

もし本当にモンスターがいるのなら恐らしくればイベントだ。

それも限りなく厄介なイベント。

街へのモンスター襲撃……それは僕らが避けようとしたメインスト  
ーリーの始まり、『王都襲撃』なのだから。

そう焦る気持ちの中、僕はミシユルの方を向いて呟いた。

「とりあえずミシユル起こさないと……」

そこには騒動の中、穏やかな寝息を立てて眠るミシユルの姿があ  
つた……。

## 04・『壊しちゃつた』

夜の街は暗く遠くから聞こえる剣戟の音が不穏な空気を出していた。

メインストーリー、王都襲撃。

破滅への第一歩は死者が眠りから醒め、人々を襲うという不気味なものだ。

骸骨系下級種モンスターであるスケルトン、同じ下級種でも少し上の長剣を持つ戦士であるスケルトンソルジャー、それらを従えた上級種の死靈使いリツチという構成で襲撃は行われる。

スケルトンやスケルトンソルジャーは下級とある通り雑魚モンスターだ。ここまでは問題はない。

しかし大将たるリツチは骸骨系を統べる上級種に相応しい力を有している。

そんなのに危険な戦いを挑むのは僕もミシェルも簡便願いたかった。

そんな訳で僕らは戦う事を避け避難する事にしたのだが……行く当てもなく彷徨っている状況だった。

というのもミシェルが中々起きなかつたからであり、その内に酒場周辺から人がいなくなつていてどこに非難すれば良いのかわからなかつた為だ。

要するに絶賛迷子中で街を走り回っているわけなのである。

「何なのよー、このつー！」

ミシェルがぐるりとターンすると、月の光を反射したダガーが円の軌跡を描く。

少し遅れてガシャン！ という音を鳴り、スケルトンが骨を撒き

散らしながら吹き飛んだ。

「ああ、もう、さつきから鬱陶しいわねっ！」

人に避難場所なんかを聞ければいいんだけど、全員どこかに非難済みなのか合っことがない。

変わりにという感じでスケルトンと何度も鉢合わせになり、寝起きで機嫌の悪いミシェルが暴れまわっている訳である。

「ミシェル！ 街の真ん中、お城なら人がいるかも！」  
「よし、行つてみるわよ！」

僕らはスケルトンに警戒しながら城へと向かつた。

城は街と広大な水によつて隔たれており一本の橋で繋がれている。入り口は一つなので迷う事もないし城は大きい。だからそこに着くまで苦労はしない。

でも僕らは城への道を進まず、その橋の手前……建物の影に隠れるようにして息を潜めていた。

「ねえ、あれつてさ。やっぱアレだと思うのよ  
「私もそう思うんだけど、どうしよう……」

アレと称された存在。

骸骨系モンスター上位の力を持つとされる死靈使いリツチ。

それが橋の前に居座り、骸骨達が橋へと突入する様子を眺めている。

カタカタという不気味な音を立てながら恐れる様子も見せずに突入を続けるスケルトンの群れ。

それを橋の王城側から騎士達が必死の形相で盾を構え、槍で突き、

払い、蹴散らす。

安定した戦いぶりを見せる騎士達は橋で完璧な防衛ラインを敷いているように見えた。

「このままリツチ倒してくれないかしら……」

ミシェルの言葉に僕もそうなればいいなとは思つものの、騎士達が勝つ事はありえないだろうと思えた。

なぜなら騎士達が骸骨達を殺しても、リツチが死靈魔法で新たな骸骨を召喚しているからだ。

延々と生み出される軍勢を相手に守勢に回っていても勝てるものではない。

ならここで僕らが背後からリツチに奇襲をかけて打ち倒せばいいのだが、それは出来ない相談だった。

リツチは骸骨種を召喚する能力、それらを統率する能力を持つているがそれだけじゃない。

リツチの最も恐ろしい所は、魔法以外の攻撃を無効化し、更に状態異常の殆どをレジストする防御性能の高さだ。

それに対するには魔法を帯びた武器を使用するかダメージソースになる強力な魔法が必要となる。

しかし僕らにはそのどちらも欠けていて、どう轟廻田に考えても勝ち目が薄かつた。

でも、どうしてリツチが城に……。

クエストでは人を逃がさない為に街の入り口に陣取つているはずなんだけど。

いや、この際それはどうでもいい。むしろ城に張り付いているなら好都合だ。

街の入り口にリツチがいないのなら僕らでも突破できる。

クエストをやり過い「あと」が出来るはずだ。

「街から一里出よつ」

僕はそう提案した。

ミシェルはリッチの方を一瞥した後、僕の目を見つめて力強く頷いた。

そうと決まれば早いに越したことはない、踵を返して一步足を踏み出した、その時だ……。

「ぐだらぬ……」

聞こえるはずのない声が聞こえた。

それは底冷えするような冷たい声色を持つ、死靈使いの声。

「生を謳歌せし愚か者よ……死から逃れられると思つな……」

リッチを視認した段階で気付くべきだつた。

骸骨系モンスターは瞳で敵を認識するわけじゃない、生命の鼓動を感じて彼らは敵を認識する。

だから物陰に隠れようと意味をなさない。それは見つかった時点で奴の射程範囲だということだ。

恐怖を感じ、闇に抱かれろ。

『サイズ・オブ・ダーク』

ぞくり、と悪寒がした。

「ミシェル、横に飛んで！」 そう叫ぶと、僕らは身を隠していた建物から全力で転がるよつに飛び退いた。

その一瞬後、夜の闇よりも暗い漆黒の風が僕らがさつきまでいた場所を通り、触れた物の生氣を吸つた。

生氣を失つた柱は腐り、その場所から建物が滑るようにズシャーン！ と音を立てて倒壊する。

「見苦しいぞ」

続けざまに放たれる死の魔法。

生ある者全てを刈り取るそれは触れた者の生氣を失わせる。

腕が触れれば腕が腐り落ちる、足に受けければ足が、体に受けければ人は一瞬で死に至る。

「右！」

それを感覚だけで避ける。本来ならそんな真似は出来ないだろう。でも、避けている。

「左から来るよ！」

僕はそれを危険なものだと認識して、的確な動作で魔法の通り道を予測していた。

恐らくはキャラクターの能力。

ミシェルが感知していない所を見ると、能力値か何かが関係しているだろうと思えた。

「ミシェル！ どうするつ！？ ッ！ …… 届んで！」

「どうもこつもやるしか！ ないでしょつ！」

言いながらミシェルは体を屈めて漆黒の風をやり過ごし、それと同時に足に力を溜めると一気にその力を解放した。

ダンツ！ ダンツ！ と地面を蹴る音が聞こえる。

ミシェルは蹴る度にスピードを上げて、漆黒の風が発生する頃には既にその先へと足を進めていた。

まるで風になつたかのようにリツチの下へと駆け抜ける。

「人风情がよくもやりある……」

褒めるようなリツチの声が聞こえる。

ミシェルは速さを武器に戦う型、速剣士を極めた前衛……賞賛されて当然。

盗賊になつても、リツチが相手だらうと決して遅れば取らない。

最後の防壁たる漆黒の刃をミシェルは「飛んで！」という僕の声に従つてかわしきる。

そのままの姿勢から身を捻ると、ダガーを斜めに切り下ろしリツチの体に刃の線を描いた。

瞬間、ギャリイ！ と金属と何かが当たる音が響いた。しかしその音は骸骨を斬り飛ばした音とは違う……。

「ふむ、所詮こんなものだね！」

リツチの体、ダガーの走つた場所には傷の一つもない。やはりと いうべきか、物理無効能力だ。

ミシェルはそれを見ると「そつだつた……」と眉をひそめて咳き、距離を取るために後ろに大きく跳躍した。

その様子を見送りながらリツチは悠々と召喚陣を敷く。スケルトンソルジャーを一本、一本……三……。

支配モンスターの無限召喚、それはリツチ攻略において絶対に防がなくてはならない一手。

だからこそ僕の脳はいつも通りに思考する。

イベントで、人の手伝いで、ゲームの中で何度も戦つてきたリッチへの対処法。

頭の中に浮かぶ言葉から一つの魔法を選び口にした。

集う力、結ばる前に無塵に返せ。

『ディスペル！』

咄嗟に唱えた物は魔法解除。

ガラスが割れるような音と共に、リッチが展開していた召喚陣を光の粒に変えていく。

しかし既に召喚されたスケルトンソルジャー一體が消えるわけではない。

「鬱陶しい、実に鬱陶しいぞ……小娘」

眼球のないリッチ、その空洞の瞳に怒りが宿る。

それに呼応したかのようにカタカタと骸骨特有の骨鳴り音を響かせながら、スケルトンソルジャーが鎧び付いた長剣を構えて僕の方へと向かってきた。

僕はそれを見ると、杖を前方へと突き出す。

スケルトンソルジャーは動きは早くはなく、攻撃力だつてそこまで高くはない。

でも耐久と速さのない僕にはそんなモンスターですら致命的だ。近寄らせるわけにはいかない。

祈りは天に、求めるは罪人裁く聖なる光。紡ぎ、枷とせよ。

『ホーリィ・チェイン！』

敵一体を束縛する魔法を口にすると、光の鎖が杖の先から何本も生まれスケルトンソルジャーに飛来する。

鎖を鬱陶しそうに長剣でなぎ払おうとするスケルトンソルジャーだが、その剣」と全身を絡め取られ動きを停止した。

残りは一体。随分と近寄られていて魔法を唱える隙はない……、それどころか既に僕に向かって長剣を振り下ろしていた。

「くつー！」

目を瞑つて痛みを覚悟する。

ゲームの中では一撃で体力全てを持っていかれる事はない。でも今の僕がこの長剣に当たればどうなるのだろう。そう思考すると、恐怖が体を硬直させた。

……。

覚悟した痛みはやってこない。

「もうちょっと前衛を信用してよね」

恐る恐る目を開けて見ると、ミシェルが不満げな様子で僕を見下ろしていた。辺りにスケルトンソルジャーの姿は無かった。

目を瞑つていた一瞬の内に倒してしまったのだろう。僕は安堵の息をついた。

状況としては振り出しに戻つただけ。

確認出来たことはやはりと言つべきかミシェルの攻撃が通じなかつたこと。

そこから考えるにリッチは間違いなくゲームと同じ能力を持つて

いる。

恐らくは僕の持つ攻撃呪文だって有効な攻撃手段にはならないだろ。

「ミシエル。コイツは無理、逃げよう

今の最善は逃亡」。

リツチの相手をすることで、橋で戦っている騎士達の援護をして加勢を待つという方法もある。

でも僕らがどれだけの間耐えればいいのかわからない上に、騎士達が骸骨の群れに勝てる保証もない。

ましてやリツチに抵抗出来る戦力かどうかもわからないのだ。そんな賭けに出る位なら逃げに徹した方がいいと僕は結論を下した。

「うん、賛成ね」

意見を纏める間にも「右！」と放たれる漆黒の風を避け続ける。集中力が切れたら終わりだ。

「魔法で注意を引くから、その内に！」

僕は唾を飲み込むと、杖の先へと意識を集中させた。

力の象徴たる赤の精靈よ。焚ける炎となり、集え！

魔力の流れで、詠唱に気がついたリツチが攻撃の手を休めた。ダメージの可能性がある魔法には警戒してしまうのだろう。この隙が狙いだ。

『ファイアーボール！』

小型の火球を撃ち出す魔法を口にした……途端、目の前が赤に染まつた。

「チウウウッ！」と周囲の空気を燃やしながら突き進む、身の丈を優に超える巨大な火の球。

それはリッチの姿を飲み込むと、周囲の建物を焦がし、溶かし、突き進み、遠く……城の外壁に大穴を作つてから姿を消した。

時を同じくして、橋にいた骸骨達も支えを失つたかのように倒れ、消滅していく。

騎士達も何が起つたのかを理解していない様子で戸惑つていてるみたいだ。

骸骨が消える……、それは召喚者であるリッチが消滅したことを示している。

その証拠にリッチのいた場所にはドロップアイテムらしき黒い宝石が落ちていた。

まさか下級呪文のファイアーボールで？

いや、そもそもファイアーボールの大きさが尋常ではなかつた。

「え？」

あまりの出来事にミシールは逃げる体制のまま、僕は杖を向けたまま睡然として固まつた。

が、焼け焦げた辺りの様子と穴の空いた城に気付くと僕は顔を引き攣らせた。

「どうしよう。お城、壊しちゃったんだけど……」

04・『壊してやった』(後編) (脚本)

修正 / 2011 / 01 / 27

紅い宝石 黒い宝石

現在この街には幾つかの噂が流れている。

骸骨の群れは隣国からの攻撃ではないのか？ というもの。とある宿屋で一夜を明かすと、想い人と結ばれるというものの。

昼飯はヒヨッピの煮込み汁だというもの。

そんな大小混在の噂の中で今最も人氣があるのが、襲撃にあった王都を救うべく現れリツチを消滅させた少女達の噂だ。始めは城の防衛をしていた騎士達を中心に広まつた噂だったが、今では王都全域に広がっているという。

そんな噂は当然のように僕やミシェルにも伝わっているわけで、一人ともため息が出る想いだった。

と言つてもリツチを撃退した後、僕らはすぐにその場から逃げ出していたからだ。

ファイアーボールが予想以上に強力だったのは嬉しい誤算だったけれど、周囲の建物やお城を壊してしまつたのはまずい。もしも損害賠償だ！ なんて言われたらお金のない僕らはどうすることも出来ないのだ。

だから見つかるわけにはいかないし、憂鬱な気分にもなるというものだった。

「たつたの一日で随分とこの街も住み難くなつたわよね……」

泊まつていた宿屋、その一階でタロルカジュースを飲みながら落ち込んだ様子でミシェルが言つた。

「はふう「とため息をつく仕草は街に起きた惨劇を愁いでいるようにも見える。

僕もそれに習つて伏せ田がちに「うん……」なんて雰囲気を出して言つてみたり。

そんな現実逃避的な行動をしているのにはもちろん理由がある。僕はちらりと店の壁に貼つてある紙に田を向けた。

紙にはこう書いてあつた。

神の加護を受け、火の精靈に愛されしエルフの少女。

疾風の如き速さで駆け抜け、一いつの牙で闇を切り裂くニヤードの少年。

国を救いし英雄を称えん。

我こそはと思うものは城へ来られたし。

これはどう考へても……。

「あたし達のこと……つて、あれ、ニヤードの少年?」

同じように張り紙に視線を送つていたミシールが眉をひそめながら言つた。

「その、ミシールの事だと思つ……」

「え、どうして? あたしそんなに男の子っぽい?」

ミシールはそう言つと不思議そうに首を傾げて自分の体をキョロキョロと見始めた。

僕としてはなんとなく少年と記された原因がわかる……でも、答えずらい。

言つたらまたほっぺ引っ張られるのかな、なんて思つたりしちゃうわけで。

えーと、どうしよう……、困る。とても困る。

問題の胸の辺りを凝視しても何も浮かばないし、さすがに胸がペ

つたんだから、なんて言えないし。

あー、うー、えーと……。

そう迷つてこると、むすつとした様子で「一ーナ。言わなくともいいわよ」とミシールが言った。

「気付いてないと思つんだが、一ーナって耳が垂れてすこい困つてますつて顔に出てるのよ」

「え？」

「その上でじつと胸ばかり見られたひさすがに、ね」

言いたい事が見破られてるー。

僕は「う、ごめんなさい！ だからほっぺ、ほっぺだけわー！」

と言しながら、頬を両手で隠すように覆つた。出余つてすぐにされたよつて、ほっぺを引っ張る」とで憂を晴らされるのを避けるためだ。

「別にそんな」としないわよ。窓にのほほの張り紙なんだから

なぜか呆れたように僕の胸を見ながら言つたミシール。

とりあえず何もされないとわかると、僕は「ほほー」と右堵も息を吐いてから言った。

「……よかつた。怒られるかと思つて」

「怒つても増えるわけじゃないんだし、それに一ーナには分けて貰う予定だからいいもの」

「え、分けて……？」

怒られないのはいいんだけど、何やら不穏な空気が漂つていて。ミシールの口元はどこか楽しげにニヤつとしてるし。それにさつきからずっと胸を見られてるような気がする。

胸……？

「」こんな風に、毎晩後ろからぎゅーってー。」

そう言つてヒルは田中も止まらぬ速さで動き、僕を後ろから抱きしめた。

「ひ、あつ！ や、そんなのだめだつてば！」

「ダメなのはほつぺだけつてさつき言つてたじやなーい！」

「い、言つたけど、言つたけどーー。」

そんな風に騒ぐ僕ら。

気付けば他のお客さんから視線が集まっていた。

街が大変な目にあつたばかりなんだから、こんな風に騒げば煩いとか鬱陶しいとか、そういう嫌悪の視線になると思うんだけど……。なぜかみんなニヤニヤと僕の方を見て「ニヤードのねーちゃんもつとやれー！」なんて声援を送つていた。

ああ、恥ずかしい。

……。

酒場のマスターがテーブルの上にタロルカジュースを置いた。

そして「いいもの見せて貰つたぜ……。サービスだ」と言つて去つていく。

僕の気分はとてもを何個も付けてしまつほどに落ち込んでいた。色々な尊厳を踏みにじられたような気分……、何か文句を言った方がいいのかとても悩む。

ミシェルは「にしし」なんて表現が浮かびそうな上機嫌な顔で、リツチから出た黒い宝石を眺めているし。

僕の惨状を気にしない所を見ると、これが女の子同士の常識的なスキンシップだったりするんだろうか。

寝るときもす”べタベタしてきたし……。

そう考えていくと、あまり不貞腐れてるのもまずいし、男だと判つても不信に思われて男だってばれるのも気まずいし、男だと判つても友達でいてくれるか不安だったのだ。

僕は「はあ」と息を一つ吐いて気持ちを入れ替えると、いつもの調子でミシルに声をかけた。

「さつきからミシルは何をしているの？」

「ん、～！ もうひょっとだから待つてー」

さつまつと片田を瞑つて宝石をじーっと見つめるミシル。

僕も身を乗り出して宝石を覗いて見るものの、特に変わった所もなく透き通つた色が綺麗だなーって思うくらいだった。

ん……、綺麗だからじこ見てるのかな？ 女の子って宝石とか好きねうだし。

でもミシルには悪いけど、こんなことをしてるのは見つかつたらまずいお城関係とかそっちの話をしたい……。

そう思つてもう一度声をかけようとした時、「…………わかったわー」と言しながらミシルが宝石を高く掲げた。

「えつと、ミシルどうしたの？」

僕がさつ聞くとミシルは得意げに胸を反らして答えた。

「なんとこの宝石はトウオネ石なのよー。」

「トウオネって、素材の？」

「さうよ。闇属性の希少鉱石…………すつ」レアモノー。」

嬉しさを表すよつにミシェルがぴょんぴょんと跳ねた。

トウオネ石はミシェルが喜ぶのも当然で、ゲームの中でもかなりの高値で取引されていた属性持ちの宝石だ。

火のロギナ。水のフレール。風のカーリ。土のヒーギル。光のルマリネ。闇のトウオネ。

それぞれが世界を支える神の力……属性を宿しており、様々な用途に使われる。

「す、い……けど、どうしてそれがトウオネ石だつてわかったの？  
私には普通の黒い石にしか見えないし、リッチのドロップアイテ  
ムつて似たような黒系の鉱石が多かつた気がするんだけど……」  
「ふふん、あたしの職業をなんだと思ってるのよ。盜賊、とうぞく  
さまよ！ 鑑定くらい初期スキルに入ってるわよ！」

「……おおー！ とうぞくます！」

たしかにそんなスキルがあつた気がする。

僕は得意げに言つたミシェルをぱちぱちと手を叩いて賞賛した。

「じゃあ、じゃあ、それを売つたら私達つてお金持ち？」

「そのとーり、豪遊して暮らせるよつになるわ！ 早速売りに行く  
わよ！」

「うん、行こー！」

僕らは突然訪れた幸運に、気持ちを軽くして立ち上がつた。

ミシェルに弄られて見世物になつたことだつて、今なら許せる気  
がする。

だからびつきりの笑顔で「マスター！ ジュースありがとひー」  
いました！ と言つてから扉を後にした。

しかし……。

現実は中々に甘くなかつたようで、トウオネ石を買い取つてくれ  
る店はなかつた。

いや、正確には買い取つてはくれるけど、ありえない程の安値で  
の買い取りばかりだつたのだ。

「おじさん、希少鉱石のトウオネ石だよ！ なんでそんなに安いの  
よ！」

ミシェルがそう詰め寄つても、道具屋の主人も、武器屋の主人も、  
みんな決まつて同じ返答をした。

「トウオネ石つてなんだい？ 聞いた事もないね。まあ、銅貨十枚  
でなら買つてもいいよ」

「そんな、だつてこれあのトウオネ石だよ！」

「ミシェル、次行こり……」

こんな具合である。

初めは僕らを騙して利益を得ようとしているのかと思つたけど、  
どの店も同じ金額を提示したことからその可能性は低いと思つた。  
だからある結論に至つた。

トウオネ石は僕ら冒険者、プレイヤーの間では高値で取引されて  
いたのは確かだ。だから銅貨十枚なんて普通はありえない。  
でも、街にある商店……N P Cだとどうだろ。

一定以上の希少アイテムは一律で同じ売値になつていなかつただ  
らうか？ そう、例えば銅貨十枚とか……。

僕らは日が暮れた頃、トボトボとした足取りで酒場へと戻つた。  
その様子からわかる通りトウオネ石を適正な価格で買い取つてく  
れる所はなく、何の成果も得られないで帰ることになつたのだ。

「今日モヒラッピの丸焼きヒタロルカジユース一人分でお願いね……」

席に着くヒミシルが沈んだトーンで一番安いメニューを注文した。

ヒラッピの丸焼きが銅貨2枚、タロルカジユースが銅貨1枚と、ボリュームと味の割にお得なメニューである。

他にもケロリンスープとか、トントンソテーとか色々あるんだけど、昨日稼いだ分のお金しかないから一番安いのに越した事はないのだ。

「ミシエル、宝石ビリビリ……。生産に使う?」

「え、あつ、宝石? う、えつと、やうね! ビリビリよ!」

注文した品が来るまでの間に宝石をどうするか話しておいつと思つたんだけど、ミシエルの様子がおかしい。

落ち着き無く辺りに視線を向けながら、妙にそわそわしているよう見えた。

「ミシエル?」

「は、はい!」

ピーンと尻尾を立てながら返事を返すミシエルにくすりと笑いそうになる。

でも、この反応はなんだり?。

トイレに行きたいのを我慢してるとか、そんなわけないと思つし

……。うーん。

もう1つここでる間に「おや、またアンタたち来ててくれたんだね。

「今日もたんとお食べ！」なんておばちゃんが料理を運んでくる。

一日連続になるけど、ヒラッピの丸焼きは相変わらず美味しいやつだ。

ミシェルは未だにおかしな挙動をしてくる。

『気にはなるけど、やっぱりこの飯は温かい内が一番。

「えっと、先食べちゃうね？」

僕はやつぱりヒラッピの丸焼きにフォークを突き刺し、口に入れようとしたら、

……その時だ。

「ま、待って、一ーナ。お金、お金足りないのよ……」

ミシェルの口からとんでもない事が発覚した。

通りでミシェルの様子がおかしかったわけだ……。

僕は少し考えた後、そつと肉の突き刺さったフォークを皿へ戻したのだった。

丈の長めな黒字のワンピースにフリルの付いた白いエプロン。頭に付けた、これまたフリルの付いたカチューシャ。今僕は本来なら絶対に身に付けないであろう装いをしている。有り体に言えばメイド服を着ているのであって……。

「お待たせしました。トントンソテーとホールをご注文のお客様ですね？」

こんな声を上げてテーブルの上に料理を運んでいる僕は給仕のお仕事をしているのだ。

ことの発端は前日。

食い逃げ寸前といふか注文逃げといふか、お金が無いのに料理を注文したのが始まりだった。

僕らは運ばれてきた料理に口を付けず、マスターにお金がないことを話したのだがお肉にフォークが刺さつてたりで返品は受け付けて貰えなかつた。

でも僕らは罪人としてガードに渡されることもなく、おまけに今晩の宿も提供されていた。

昼間にミシェルと僕が騒いでいたのを見て、それで覚えていくれたのもあり、後で払つてくれるなら……ということになつたのだ。

でも、ここからが問題だつた。

支払いの方法を「モンスターを倒して稼いで来ます！」と言つたところ、「その装備じゃ駆け出しだらう？ 無理はするな」「なんて言い返されてしまったわけで。

実力を見せようにも『ファイアーボール』はお城壊しがバレると  
いけないので見せられず、神聖魔法は最上級の回復魔法をかけたに  
もかかわらず「お譲ちゃん、神聖術士だつたのか」と言われただけ  
だつた。

ミシェルもこんなことになつたのが尾を引いてるのか落ち込んだ  
ままだつたし……。

そんなわけで僕らは力量を理解されず、給仕として働くことにな  
つたのだ。

「えーと……、はい、こちらになります~」

僕が笑顔を作つてテーブルに料理を運ぶと、それに気が付いた男  
が「お、おう」とどもつた声で返事をしてチラチラと視線を上下に  
振つた。

視線の先は顔と胸の辺りを行つたり来たりとしていてどこを見て  
いるのかは一目瞭然だ。

料理を置くために少し前かがみになると、その視線が胸に釘付け  
になつてゐるのも感じた。

こういう視線つてバレバレなんだ……と思ひながら、目の前の男  
の悲しい性に同情した。

「では、じゆつくつお召し上がりください」

営業スマイルを送つて厨房に戻つていく。

何はともあれ、そんな視線くらいで文句を言つていたら仕事なん  
て出来ないのだ。  
出来ないのだが……。

「二ーナは良く平然としているられるわね……」

ミシェルの方は相当参つてゐるようで猫耳がペターンと萎れ、哀愁を漂わせながら肩まで落としている有様だった。

それも仕方がないと言えば仕方がない。

ミシェルは僕とはちょっと衣装の形が違う……、僕のが丈の長いロングバージョンだとすると、ミシェルの衣装は胸元が大きく空いたデザインでスカートの丈が短いショートといった感じだ。さらに両足に食い込む二ーソックスとスカート部分の絶対領域が男心を擗る一品になつてゐる。

なので太もも辺りを目掛けて手を出してくる男がいたりするのだ。もちろんミシェルは速さを活かして華麗に避けてゐるけど。

と、こんな衣装がファンタジーな世界にあるのはおかしく感じるんだけど、残念ながら人気アニメとのコラボでゲームの中に衣装が実装されていた。

衣装を渡された時に不思議に思つて聞いてみたら、神聖教会のお偉いさんがご神託を賜つて服のデザインを世に発表してゐるんだとか。ここに宗教は一体何を信仰しているんだろう……。

「平気というわけじゃないけど、お仕事だつて割り切るしかないと思つよ」

不満を言つても始まらないし、僕はミシェルにそう答えるとお皿を何枚か掴んで新しいテーブルへと向かつた。

酒場は盛況そのもので、勤め帰りらしき騎士、大斧を担いだ冒険者、ぼろつちい衣服だけの男など様々な職種の人や種族が来ているようで、マスターと奥さんの二人でやつっていたとはとても思えないくらいだった。

そんな活気に満ち溢れている酒場だからだろうか、色々な話を聞けるのがとても楽しい。

手に一枚。腕から胸の上にかけて更に一枚乗せながらトトテと

歩けば……。

「例の、リッチを殺つた奴らはみつかつたのか?」

「いいや、やつぱりだ。貧民街のガキが来たり偽者ばかり城に来やがるしよ……。しまいには、『ブリンクの親子まで騙つてきやがつたんだぜ』

「そりや災難だなあ。ま、ほれ、一杯飲めや

なんて話が耳に入るし。

「おいおい、あの二ヤードのねーちゃんパンツ見えそつだぜ……」

「エルフの娘も見ろよ。細身の体に乳が……、すげえ……」

「はあ……はあ……」

「こんな話も……いや、これは聞くべきじゃない。

「ここの間、銀山が閉鎖されたじゃん? あいやモンスターの仕業らしいぞい」

「おい、もうボケたのかよ爺さん。銀山が閉鎖したのはもう十年も前のこじだりーが

と、バリエーションに飛んだ話を耳にすることが出来る。

情報は酒場で得る物だつて言つけど、本当にここの情報の宝庫だと思えた。

……。

そんな風にテーブルを何度も回つて、客の入りが途絶えてきた頃だ。

マスターから「もうあがつていこいぞ。裏に回つな」と声をかけら

れた。

「あ、はいっ。じゃあ、最後にコレ運んでからこしますね」

僕はそつ返事をして今日最後になる皿をお客さんの所へ運ぶと、酒場の裏手に通じる扉をくぐった。

酒場の裏手はマスターと奥さんの住居になつていて、先についていたミシェルが「んんっ、はむっ」とトントンソテーを食べていた。一日中給仕をしていたからメニューにある品はばっちり把握している。

「ああ、一ーナちゃんかい。お疲れ様だよ。ほり、そこにあるのはサービスだからね、冷める前に食べちゃいな」

おばちゃんにそつ言われると、僕はミシェルの前に座つてソテーを食べ始めた。

トントンソテーは大きめにカットされたトントンといモンスターの肉と大小の野菜を「ロロロロ」と入れた炒め物だ。

口を運べばシャキシャキとした野菜の食感と、溢れる肉汁が妙にマッチしていく非常に美味しい。

「飯が欲しくなるところだけ……、そつ思いながらパンを千切つて口に入れた。

「ミシェル。今日の、楽しかったね

行儀がちょっと悪いけど僕は食べながら話しかけることにした。それに対してもミシェルは何かを喋りつとして「んっくっーー？」と喉を詰まらせてから答えた。

「急に話しかけてくるから、もー……。うーん、あたしは変な一杯いたし、でも、うん。たぶん、楽しかったわ」

ミシェルも歯切れの悪い答えだつたけど、楽しかったようだ。  
思い出すように身振り手ぶりを交えながらミシェルが言葉を続けた。

「ほら、料理運んでいくじゃない？ お尻触つてこようとするのはウザいんだけど、色々な話し聞けたのよ」

「うんうん。私も色々話し聞いちゃつた。あれ、変なのとか混じつてたよね」

「そーそー！ 銀山のお爺さんとか、通りがかる度に「この間、銀山が」って同じことばかり言つてるの。あれには笑っちゃつたわ」「それ相手の人も何度も訂正して、大変そつだつたよね」

僕らはマスターが来るまでの間じつやつて話を咲かせていた。  
その話の中には僕は直接聞けていなかつたけど、クエスト『王都襲撃』の被害の話しあつた。  
避難した人達は神聖教会や職業修練所とかそういう施設に逃げ込んだりして死傷者は殆どいなかつたらしい。  
知つてる人はいないけど、なんとなく良かつたなつて思う。

「でね、このリザードの奴なんだけど、尻尾であたしのスカート捲りうつしてきたのよ」

「わわ、さつきも撃退された人でしょそれー。チャレンジジャー」「そつなのよ！ あのトカゲ……」

部屋に着いても話しあはる事はなく、夜通し僕らは話しあつた。

部屋の方はマスターが今日の分まで無料で泊まつていって言ってくれていた。  
何から何までお世話になつぱなしで、ちよつと悪いなつて思つてしまつべりー。

でも、そんな好意に少しだけひつかかる物を僕は感じていた。  
僕の手の中にある、メイド服。

マスターは僕らにこの装備まで無償でプレゼントしてくれたのだ。  
ミシェルは「あたし達、気に入られてるわね。ふふんっ」なんて得意げになつて喜んでいたけれど、僕はこれを単純に喜ぶことは出来なかつた。

だつて、メイド服はクエストを経由して得られる装備で、そのクエストはどこかの酒場だつたから。

だつて、メイド服はNPCのお店でもそれなりの値段で売れるもので、無償で渡せるようなものではないハズだから。  
推測が正しければ、マスターの好意はゲームのクエストによるもの。

ゲームの世界だとは思つていたけれど、人の好意までプログラムに左右されているのはなんだか怖い気がした。

「二ーナ、どうしたの？」  
「あ、うん。少し眠になつて」  
「眠いつて……ああつ、もう外が明るい！ 早く寝ないと… 二ーナ、ぎゅーつてさせと、ぎゅーつて！」

そう言って僕をベッドの中に引きずり込むミシェル。

そんな行動を見ていると、あまり深く考へない方がいいのかな？  
と迷つてしまつ。でも……。

「うん、一杯さかーつしていいよ。今日はさーびすだからね」  
ちょっとだけ人のぬくもりが欲しい……、そう思った。

06・『人の温もり』(後書き)

2011/01/31 通りかかる旅に

通りかかる度に

## 07・『カチカチ』

「カチカチパンを……えーっと、4ついただけますか?」「あいよ。お譲ちゃん可愛いから……銅貨3枚にまけておくよ」

僕は笑みを向けて「ありがとう」と言つてから、メイド服のHプロンに付いたポケットに手を入れた。

銅貨を一、二、三枚……そして残りは一枚つと。

注文逃げの一軒があつた為、僕がお金を探理することになつていた。

ミシェルには悪いけど、やっぱり不安だし……。

僕はパンを受け取ると「またよろしくな」という声を背後に聞きながら外で待つていたミシェルに声をかけた。

「お待たせー」

「ちゃんとお買い物は出来たー?」

ミシェルじゃあるまいし……なんて思いながら、曖昧に笑つてパンを二つ手渡す。

「四つ買つたから、ミシェルの分はこっちね」

「うむうむ。って、このパンは名前通り本当に硬いのね」

「そうみたい。カチカチに作つて保存食にしてるつて言つてたよ」

「……カンパンみたいなもののかしら」

ブツブツと言い、パンを興味深そうに見るミシェル。

その呴きの通りカンパンに似ている食べ物で、拳大のサイズをしたこの丸パンはモチモチ感は一切ないらしい。

保存食として利用されているのも同じで、ちょっと遠出する時に

携帯するのがこの世界での常識らしかった。

さて、どうして僕らがそんな保存食を購入したのかと言ひつと……。

昨日酒場で聞いた銀山へと向かうためだつた。

短絡的だと思うかもしれないけど、僕の予想通りならあの漫才のような会話はクエスト関係じやないかなつて睨んでいたりして、何らかの報酬が期待出来る気がしたのだ。

もしクエストじゃなくても、銀山なら銀鉱石がザックザック眠っている可能性もあつて武器を作る材料にもなるし。

そんなわけで僕らはひらひらとメイド服をひるがえしながら街の正門へと歩いていく。

これから銀山に行く格好としてはシユールんだけど、ちょっとした能力補正が付いていて中々侮れない性能の服なのだ。

見ために關しては元々の初期服がコスプレみたいな物だったし、慣れとは怖いもので昨日一日着ていたことで何とも思わなくなつていた。

「二一ナ、銀山つてどこにあるか知つてるの?」

「えつと、たしか……。まずは街の正門から出るよね

「うん」

「それからまつすぐの道があるんだけど、三つに別れている所を左だつたと思つよ

「あひづよ」

僕らは歩きながら道の確認を始めた。

現在地の王都は大陸西の端つこにあり、その正面にはだだつ広い平原が広がっている。

その草原の北側に隣接した森、その傍を通りの一本の道があつて、中ほどから北、東、南の三方向へ道が別れている。

僕らが目指す銀山はその内の北で、あとは道なりに森の中を進ん

でいけば田的の場所に辿り着ける寸法だつた。

「あの、銀山つてこの道を真っ直ぐ行って途中を左ですかね?」

「銀山? ああ、ヘンネ村に行くんだろ。そっちで間違いないねえぞ」

念のために正門の騎士に声をかけて確認するのも忘れない。

銀山の麓にはたしかに一つ村があつたはずだし、方向は合つてゐるみたいだ。

僕らは「ありがとー」と手を振り、正門を抜けた。

ふぎゅ!

ふぎゅふぎゅ!

平原はこの鳴き声で判る通り、ヒヨウピの生息地になつてゐる。なのでつこでとばかりにミシユルがヒヨウピにダガーを突きたてながら逃げ。

路銀を稼ぐ」とまで出来る、一石二鳥の旅だ。

ふぎゅ!

「よし、これで30枚」

「おー、やつぱり盗賊だと集めるの早いね」

「ふふん、もちろんよー。と、言いたいんだけど、まだ盗みのスクリが無いから微妙なのよね」

そう言いながらミシユルはやれやれといった感じに肩をすくめ、両手を持ち上げた。

職業スキルは初期スキル以外は購入するかモンスターからスクロールというアイテムを入手しなくてはならないのだ。

なのでお金もなく、モンスターからも手に入れていない僕らは新しいスキルを使えない。

世の中は本当に世知辛いと思つ。

「このまま行つたらヘンネ村に着くまでに羽が一杯になつて大変なことになりそうよね」

「でも、他にすることもないし、ポケットに詰められるだけ詰めてもいいかも？」

「ん、じゃーあ、一杯にしきやつわよー！ えーい！」

こんな風に始めは余裕を持っていたのだが……。

太陽が真上から横に傾き。

「もうすぐ酉戌よー！」

「あ、あそこに一匹いるよー！」

さりに日が暮れ、辺りもすっかり暗くなつた頃。

僕らは未だ道の分岐点にすら到達出来ていない事に気が付いた。

「……ナ……。これ、道あつてるのよね……」

「一本道だつたし、あつてるも何もないはずなんだけど……」

僕らはポケットをヒヨッピの羽でパンパンにして、真つ暗な道をひたすらに歩いていた。

昼間しか出現しないヒヨッピの姿はとづくにない。

変わりに、ワオーンという犬のような遠吠えが聞こえ始めていた。

「ミシェル、休憩しない……？」

「お腹も空いてるし、そつね……。うーんと、あそここの木なんかい

いんじゃない？」

僕が提案すると、ミシェルが森から草原側にはみ出している木を指差した。

木の周りには草も生えていなく、休むのに丁度良さそつだと感じた。

「はふ……」

「よーいじょっと」

僕とミシェルは掛け声を出しながら木に背中を預けて座った。両足を「んーっ！」って思いっきり伸ばすと、とても気持ちがいい。

隣を見るとミシェルも同じように足を伸ばして疲れを取っているみたいだった。

「ミシェル、」めんね。ヘンネ村までこんなにかかると思わなくて……

僕がそう言つとミシェルは不思議そうに僕を見つめた後、呆れたような口調で答えた。

「なーに謝つてるの。あたしだつてすぐに着くと思つたし、ヘンネ村までゲームだと三十分かからないでしょ？」

「うん。かからないハズ……、でも王都だってすごい広くなつてたし、ひとつも時間すごいかかるつて気付くべきだつたから」

「さうだけど、今更言つても遅いじゃない。それに……」

ミシェルは言葉を溜めた後、「じゃーん！」と言つてカチカチパンを取り出した。

「せひ、お腹減つてゐるからそいつ風に落ち込んじゃうのよ。食べよ？」

「え、あ、うん」

あまり関係ないような気もするけど、ミシヨルが言つたように今更言つても現状は仕方ないし変わらないのだ。

お腹が減つているのも確かで、あまり深く考へてもしようがないと思い、僕もパンを取り出して噛り付いた。

瞬間、ガチッ！ と何か嫌な音がした。

隣でも同じようにガチン！ と音がする。

「うつー！」

「な、なにこれ！ 硬すぎよー！」

僕とミシヨルは顎をさすりながら、音を鳴らした物体をしげしげと見つめた。

それは自己主張するかのように月の光を反射して照り光つていた。噛んだ場所に歯型すら付いて居ない、カチカチパン。

「これつてどうせうつて食べればいいのかな……」

「そんなの気合に決まって……はむつー んつー かつたーい！」

「こんなのが食べられるわけがない。

でもやつぱりお腹は空いているし唾液がさつきからじわーっと出

てきている。

別の食べ物があればいいんだけどこれしか持つていらない僕らは、カチカチパンを食べる方法を考えるはめになった。

結果どうなったかとこつと……。

「んんむう、あむ、んんうつ！」  
「むうーむん、んんうつー、うーー！」

パンを口で咥え、唾液で柔らかくする作戦に出たのだ。  
もちろん口にあんな物を咥えているんだから、満足に話しだつて  
出来やしない。

僕は「ふぐふぐっ！」と言葉にならない声を上げ、杖を構えて立ち上がつた。  
そして唱える。

力の象徴たる赤の精靈よ。焚ける炎となり、集え。

「ふあうふあーふおーうー！」

う、……発動しない。

僕は口からパンをカポツと取り外すと、赤面しながらもう一度魔  
法のキーを口にした。

『ファイアーボール！』

ゴウツという音と共に巨大な火球が現れ、辺りを照らす。  
照らした先には一、二、三……六……十と数えるのも面倒な量の  
沢山のモンスターに囲まれていた。

グルルと喉を唸らせ、開いた口から涎を垂らして僕とミシェルを取り囲むそれはフォレストウルフ。  
ヒヨッピと交換する形で夜の平原に出没する狼型モンスターだつた。  
デュウウ！ その包囲の一角を火球が突き抜け、数匹のフォレス  
トウルフを焼き飛ばしていく。

「困まれてるよー。」

僕はそう言つて後ろを振り返る。するとパンを大事そうに口に含んだまま「ぐ、ふぐつーー」と声を上げ、ダガーを取り出すミシヨルの姿が見えた。その姿はとても情けないので、ミシヨルがダガーを振るうと面白いようにフォレストウルフが倒れしていく。絵面的に何かが間違つている気もするけど、たぶん気にしたら負けだ。

「今度は、そつちー『ファイアーボール!』」

僕も負けじと魔法を唱える。

その度に肉の焼ける匂いがして、フォレストウルフのドロップアイテムである牙が地面に落ちる。確実に数を減らしているはず。なのに、僕らを包囲するフォレストウルフは一向にその数を減らしているようには見えない。それどころか増えているようすすら感じた。

「……ツー？」

丁度魔法を撃ち終わって次の対象を決めるとき、タイミングを伺っていたのかフォレストウルフが僕へと飛び掛ってきた。

その数は二。

僕は杖を横に薙ぎながら一匹目のフォレストウルフを横に飛ぶ事で回避する。

そのまま地に足が着くと、腰を低くして杖を斜めに振り上げた。

「一、二、三、」

気合の声と共に放つた一撃は、一匹目の頭部に当たりフォレスト  
ウルフを遠くへと弾き飛ばす。

この程度の数なら僕の近接能力でだってなんとかなる範囲のよう  
だ。

でも、もつと多くの敵に攻撃されたら……、そう考えると悠長な  
真似はしていられない気がした。

杖を構え、牽制しながらチラリと後方へ視線を送る。  
ミシェルは「ふぐつ！ ふぐうーー！」と何か言いながらモンスター  
の群れに突っ込み、ダガーを一心不乱に振っていた。

その周囲には大量の牙が地面に落ちている。

それはかなりのフォレストウルフを倒した証でもあるんだけど、  
残念ながら包囲する敵の数が緩んでいるようには見えなかつた。

「敵多すぎるよー 一曰合流しよー！」  
「ふぐつー！」

僕はその返事を肯定と取り、ゆっくりと後ずさる。  
ミシェルも敵を振り切ったのか、僕の後ろでトントンッという着地の  
音が聞こえた。

そして、どうしようか話をきり出そうとした時……。

「助太刀します！」

と、すぐ後ろ、背後から幼い女の子の声がした。

さらにその後ろ、遠くからは「ふぐうーー！」といつ声が聞こえる。

僕は乱入者に驚きながらも、ミシェルとの意思の疎通が出来てい  
なかつたことを悟つたのだった。

ボロ布のような色褪せたローブを翻し、幼い少女が黒い髪、ツイ  
ンテールを揺らしながら舞う。

手に持った赤黒い短刀を真上に向けながら、宙に傷を作るよう  
に振るつていく。

紫の光線が走り、次第にそれは一つの意味を成す。

黄泉に迷いし靈魂よ。我が魔力を喰らい、契約と共に器へ満  
つるがいい。

『リビング・デス!』

描かれたのは屍術独特の魔法陣。

死せる者を生き返らせ自分の下僕と成し、恐れを知らぬ兵として  
扱う魔法。

その効果は撒かれた触媒を対象に行われる。

即ち……。

「ふぐう!?

地面に落ちていたフォレストウルフの牙。

そこを始点として目覚める大量の死者は、フォレストウルフの亡  
骸。

カタカタと揺れ、白い骨が向き出しの不死なる獣、ボーンウルフ  
の召喚だ。

その異様な光景を前に、フォレストウルフ達は遠巻きに喰りをあ  
げる。

「みんな、やつちやつてくださいー！」

黒髪の少女が声を張り上げると、短剣を掲げ指揮棒のように振った。

少女の指揮に合わせて、ボーンウルフの群れがフォレストウルフの群れに襲いかかる。

だが、始めに飛び掛つたボーンウルフは骨を撒き散らしながら潰された。

一匹目もフォレストウルフの体当たりにより頭の骨を吹き飛ばされた。

かろうじて二匹目がフォレストウルフの首に喰らい付き、その命を奪つた。

同型モンスターによる多数対多数の戦いは数の多さ、質の良さで勝負が決まると言つていい。

数にしても肉体能力でいっても肉のあるフォレストウルフが有利だ。

だから、ぶつかり合えば当然のようボーンウルフの被害が多くなる。

しかしだ、ボーンウルフが劣勢に立たされることはなかつた。

ボーンウルフの強みは骨を食い飛ばされても何の反応も示さずに突き進む愚直さと、その体が欠けても術者の魔力で補充され再生する継続戦闘能力にある。

滅すことのない体で、緩やかに相手の戦力を削いでいくことこそがボーンウルフの真価なのだ。

次第に数を少なくしていくフォレストウルフ。

狼達の攻防戦を前に、僕はその光景に圧倒されながらも少女の背

後を守るよつに位置取つた。

もしこの状況が逆転されるとすれば、指揮者である少女がやられた時に限るからだ。

……。

フォレストウルフとボーンウルフの数の天秤が傾いた頃、フォレストウルフの達は森の中へ逃げるよう駆けていった。

それに少し遅れるようにボーンウルフが塵へと変わる。

魔法の効果を切つたのだるうと思つた。

「助けてくれて、ありがとうね」

「いえいえ、同じ冒険者として助け合つのは当然のことですからー。」

僕がお礼を言つと、少女はハキハキとした口調で答えた。  
さつきの魔法を見ると屍術士なのだと思つたが、素直そうな口調  
とのギャップが凄まじい。

「私は、神聖、あー、えつと、精霊術士の二ーナ。そしてこつちが

……」

「ふぐうー！」

「こつちが、盗賊のミシールね」

「はいっ。二ーナさんとミシールさんですねー。しつかり覚えました！ あ、申し送れましたけどクルミは屍術士ですー！」

クルミと名乗つた少女はぺこりとお辞儀をしながら言つた。

未だにパンと格闘しているミシールは放つておき、僕らは何度か言葉を交わした。

聞くところによると、この少女……クルミもヘンネ村へ行く途中  
だつたらしく。

王都へは職業に就くために行っていたらしく、やつとのことで屍術士になれたのだとか。

「あれ、職業つて職業選定所でお祈りするだけじゃなかつたかな?」「お祈りするだけなんんですけど……、クルミは能力が足りなくて……。恥かしながら、長い時間かかつちゃつたんですよー」

転職に能力が必要、というのは初耳だつた。

この世界独特のシステムなのかな？ もしくは僕らプレイヤーの場合は始めから転職に必要な能力というのがあった？

どちらにしでも既に軽暗にしてしまっている僕には関係ないけれど……。

「そつか、がんばつたんだね！」

「そうですそうです！ がんばりました！」  
なので、早く父と母に報告して行こうと思つてゐるのです。」

「おーしゃあ、急いで帰らんないとね」「ですですっ！」

そんな調子で元気良く話すクルミだったが、ふと何かに気付いた  
ように横に視線を向けた。

「あ、うう、ええば、ずつと氣になつていていたのですけど……」

「うんうん、何かな？」

「あの、ミシエールさんはどうしてそのままカチカチパンをお口に入  
れているのですか？」

僕とクルミから視線が集まると「ふぐ？」とミーシェルが声を上げ

た

どうやら、まだ食べられる柔軟にはなつていないらしい。

でも、なんだろう？ クルミの聞き方に違和感を覚える。

「えっと、そのままって？」

「はいっ、普通は何か硬いもので……えいっ！ って碎いて、中の柔いところだけ食べますよね。だからそのまま食べるのってクルミは珍しいと思って」

「……そ、そうなんだ」

「ふぐつ！？」

「あっ、ええと… 別にミシェルさんが変つて言つてるんじゃないで！ ニヤーダリです」こ食べ方するんですねつて……。あ、その、えつと、う……、ミシェル、さん……？」

驚愕の事実を得ると共に、僕達の無知さを披露してしまったようだ。

まさか力チカチパンにそんな食べ方があるとは思わなかつた。ミシェルなんて涙目になり「あたしがんばったのに……」と言いつながら唾液濡れのパンをエプロンで拭いてるし。僕たちの苦労は何だつたんだろう……。

他にも旅をする時の心得のよつたものまで教えて貰つた。

中でも耳寄りだつたのがモンスター避けの匂い袋で、これがないと匂いを嗅ぎつけられてモンスターと遭遇する可能性が格段にあがり、おちおち休んでもいられなくなるんだとか。

僕らが匂い袋を持していなかつたことをクルミに告げると、驚かれると共に、大量のフォレストウルフに襲われていたことにも納得したようだつた。

……。

休んだ後、クルミと僕らは行動を共にすることになつた。

行き先が同じヘンネ村ということもあつたし、クルミの使つた魔法『リビング・デス』は消費魔力が多く、残りの魔力を考へると一人で進むのは心許なかつたらしい。

少し休んだら魔力とかつて全快するんじやないのかな？ と思つたけど、どういうことなんだろう。

ダスク・ワールドでは知力の高さに応じて数秒毎に魔力の回復がされていた。当然高い数値の方が回復が早い。

どんなに知力が低くても何分も過ぎれば全快になるとは思つんだけど……。

やつぱりゲームとこっちの世界では何かしらのズレがあるのだろうか？ その内、調べて見る必要があると思つた。

僕らは平原の文基点である三叉を北に進み、森の中へ入つた。

背の高い針葉樹が立ち並ぶ薄暗い森だつたけれど、道には木の合間から光が差し込み、不気味というよりは綺麗といった景観だつた。クルミと出会つてからはモンスターに遭遇することもなく、順調な旅路だつたといえる。

「見えてきました！ あれがヘンネ村です！」

故郷の村に帰れるのが嬉しいのか、クルミがはしゃいだ様子で声を上げた。

その声につられて遠くを見れば、茶色い建物が木の隙間から見え隠れしている。

「あそこにクルミの家があるのね。早く着いて普通のご飯が食べた

いわ

「はいっ！ お山では美味しいものが一杯とれますから、ご飯は美味しいですよー。ミシェルさん、行きましょうー！」

力チカチパンはこりごりなのかミシェルが愚痴る。

それを聞いたクルミは手を大きく振つて「一杯」の部分を強調する、先導するように歩調を速めた。

でも、さすがに村が見えたとはいえ、まだまだ時間はかかる。

そんな、村につくまでの合間に、クルミが村について色々と語り始めた。

「まずは、成り立ちからなのですけど……。お一人は銀山に向かつているのですよね？」

「うん、そうだよー」

「そそ！ 銀をざつぐざつぐ掘るのよつ」

「それでは、その銀山なのですが……」

クルミによるとヘンネ村は銀山を背にした銀の採掘で栄えた村で、その時似働いていた労働者達が主な住人となつてているという。

現在はモンスターの増加により銀山で採掘は出来なくなつたが、もう一度銀山で掘るために住人全員が力を合わせてがんばつているのだと。

クルミが子供なりに冒険者……屍術士になつたのも、村のみんなと一緒に銀山をモンスターから取り戻すためらしい。

物凄い健気というか、いい子だな……と思う。

そういうた村の話しが一段落した頃、僕らは村の入り口、木で作られたアーチの前で立ち止まつた。

「ここが入り口です！ お二人とも、ヘンネ村に……よしよし、そ……？」

クルミが嬉しそうにアーチに駆け寄り、村の紹介をしようとした。だが、目の前にある奇妙な物を見ると、言葉の先を失わせていつ

た。

……奇妙な物。

それは一本の支柱、その片方は途中から折れ、ウェルカム！ と書かれた上部の看板が地面に落ちている。

そんな、過去にアーチだつたであろう物。

「どうして、看板が……おかしいです。クルミ、ちょっと行つてきます！」

「え、クルミちゃん。待つて！」

静止の声も聞かず、クルミが村の中へと走つていく。  
唐突な行動に対応できずにはいるが、ミシェルが「二一ナ、何して  
るの！」と言つて走り出した。

そうだ。固まっている場合じゃない。

アーチが壊されていたということは、壊れた原因があるのだ。

アーチの奥、村の中も何らかの破壊の跡がある。

僕は心臓がドクドクと早まるのを感じながら、ミシェルに続いて  
クルミの後を追つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3701q/>

---

冒険の続きをしよう

2011年2月10日02時07分発行